

調査報告

沖縄県内の断酒会に参加しているアルコール依存症者の自殺に対する意識および態度に関する研究

宇良俊二¹ 當山富士子¹ 田場真由美¹ 高原美鈴¹ 金城芳秀¹

【目的】沖縄県内の断酒会に参加しているアルコール依存症者の自殺に関する特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】平成21年8～9月に、沖縄県内の断酒会に参加しているアルコール依存症者128名を対象として、無記名自記式質問紙調査を行い、自殺に関する意識および態度について質問した。

【結果】101名から回答が得られ(回収率78.9%)、回答不備を除き、有効回答97名(有効回答率75.8%)を分析対象とした。男性85名(87.6%)、女性12名(12.4%)、平均年齢52.0歳(標準偏差11.2歳)であった。過去に自殺念慮があった者は58名(59.8%)、自殺未遂の経験者は、31名(32.0%)と、どちらも全国調査と比べ高い割合であった。さらに男性において、自殺未遂経験と関連のみられた項目は、「年齢」「10代からの飲酒」「アルコール依存症と診断された年齢」「断酒会への出席状況」であり、その他の「婚姻状況」「同居者の有無」「断酒期間」「再飲酒の有無」では統計学的に有意差はみられなかった。

【結論】男性で自殺未遂経験のある者は、自殺未遂経験のない者と比較して、平均年齢が有意に若く、10代からの飲酒があり、アルコール依存症と診断された年齢が若く、断酒会への出席が不規則であった。沖縄県内の断酒会に参加しているアルコール依存症者では自殺念慮および自殺未遂の経験は全国調査より高い割合であった。

キーワード：自殺、アルコール依存症、断酒会、沖縄県

はじめに

日本の自殺死亡率は平成20年度で24.0(人口10万対)であり¹⁾、先進7カ国中最も高く、早急な対策が必要といわれている。また、フィンランドにおける大規模な心理学的剖検調査によると自殺者の90%以上が生前に精神障害に罹患していたことが明らかとなっており、その内訳はうつ病が66%、アルコール依存症・使用障害が42%で高率であったことが明らかにされている²⁾。日本では高橋のパイロットスタディで精神障害の診断ができるのは自殺者の約70%と報告されている³⁾。

平成18年には自殺対策基本法が公布・実施され、多くの調査、研究、対策の実施が行われているところである。以前から特にうつ病に対する調査研究は盛んに行われており、特に新潟県東頸城郡松

之山町における自殺予防活動は実績も上げている⁴⁾。しかし、フィンランドでの自殺既遂者の心理学的剖検によると、男性においては大うつ病と診断された者よりもアルコール依存症と診断された者が多かった、という報告がある⁵⁾。また、アメリカにおける大規模調査では、双極性障害(躁うつ病)では高率でアルコール使用障害が併発し、アルコール使用障害のない双極性障害に比べ2倍以上の自殺企図が報告されている⁶⁾。さらに日本ではアルコール依存症者の約30～60%に自殺念慮があり、約10～30%に自殺企図や未遂の経験があるという報告もある^{7,8,9)}。しかも、鈴木のアアルコール依存症者の長期にわたる予後調査では約10%が自殺しており¹⁰⁾、アルコール依存症も自殺対策として重要な位置づけが必要であることが分かる。

野田らの研究では、自助グループへの入会と例

¹ 沖縄県立看護大学

会への参加がアルコール依存症の予後に影響するとの報告がある¹¹⁾。沖縄県内にはアルコール依存症者の自助グループとして断酒会が全県的に展開されているが、自殺に関する調査は行われていない。

そこで本研究では、沖縄県内の断酒会に参加しているアルコール依存症者の自殺に関連する特徴を明らかにすることを目的とした。

．研究方法

1．調査期間

調査期間は平成21年8月～9月。

2．対象

沖縄県断酒連合会に所属するほぼ全ての断酒会例会（本島12カ所、離島5カ所）を対象会場とし、各会場の会長へ研究の目的と方法を口頭及び文書で説明した。同意の得られた会場で調査を実施した。対象者は、断酒会例会に出席しているアルコール依存症の当事者とした。

沖縄県断酒連合会：公益社団法人全日本断酒連盟に所属している沖縄県内のアルコール依存症者の自助グループ。

3．方法

無記名自記式質問紙調査を実施した。対象者へは、例会の開始前に口頭及び文書にて研究の目的と倫理的配慮を説明し、同意の得られた者にのみ回答を依頼した。例会終了後封筒へ入れて厳封し、回収箱への回収と後日郵送する方法との両方を選択できるように配慮した。

4．倫理的配慮

対象者へは、研究への協力は自由意志であること、無記名であること、途中辞退も構わないこと、回答しなくても何ら不利益のないこと、データは全てコード化し個人が特定されないこと、本研究以外には使用しないことを口頭および文書にて説

明し同意を得た。

なお本研究は沖縄県立看護大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

5．調査内容

調査内容は、先行文献^{7, 8, 10, 11)}を参考に、当事者の属性（年齢、性別、婚姻状況、同居家族、初飲年齢、アルコール依存症の診断年齢、断酒会例会への出席状況、現在の断酒期間、再飲酒の経験、断酒出来ている理由等）、自殺に関する項目（自殺念慮や自殺企図、断酒出来ていない場合の自殺の可能性等を「はい」「いいえ」で回答を求めた）とした。

6．分析

統計学的分析はSPSS ver.14を使用し、比率の比較ではPearsonの²検定、変量の2群間比較では正規分布していたのでStudentのt検定を行った。いずれも両側検定で有意水準は5%とした。

．結果

1．対象者の背景（表1）

128名への調査依頼に対し、回収数101名（回収率78.9%）、性別や年齢等基本属性への欠損の多いデータを除外し、97名を有効回答とした（有効回答率75.8%）。男性85名（87.6%）、女性12名（12.4%）であった。平均年齢52.0歳（標準偏差11.2歳）。婚姻状況は既婚42名（43.3%）、未婚22名（22.7%）、離婚または死別26名（26.8%）であった。独居者は27名（27.8%）、20歳未満でアルコールを飲んだのが72名（74.2%）、アルコール依存症と診断された年齢の平均は42.3歳（標準偏差11.4歳）であった。2年以上断酒している者は33名（34.0%）、断酒期間が3ヶ月に満たない者は22名（22.7%）であった。再飲酒（スリップ）の経験は57名（58.8%）にあった。現在断酒できているのは断酒会に参加しているからと答えた者は、78名（80.4%）であった。月に1回以上（定期的に）断酒会へ参

表1 対象者の背景 (n=97)

		n	%
性別	男性	85	87.6
	女性	12	12.4
婚姻状況	既婚	42	43.3
	未婚	22	22.7
	離婚または死別	26	26.8
	未記入	7	7.2
同居者	あり	70	72.2
	なし	27	27.8
初めて飲酒した年齢	10代	72	74.2
	20代	24	24.7
	未記入	1	1.1
アルコール依存症と診断された年齢	30歳未満	11	11.3
	30歳以上40歳未満	26	26.8
	40歳以上50歳未満	27	27.8
	50歳以上	25	25.8
	未記入	8	8.3
断酒期間	3ヶ月未満	22	22.7
	3ヶ月以上2年未満	41	42.3
	2年以上	33	34.0
	未記入	1	1.0
再飲酒(スリップ)の有無	あった	57	58.8
	なかった	37	38.1
	未記入	3	3.1
断酒会に参加しているから断酒できる	はい	78	80.4
	いいえ	17	17.5
	未記入	2	2.1
断酒会への参加状況	規則的	86	88.7
	不規則	11	11.3

表2 自殺に関する意識および態度

		n	%
自殺念慮	はい	58	59.8
	いいえ	39	40.2
自殺念慮時の飲酒	はい	45	77.6
	いいえ	8	13.8
	未記入	5	8.6
自殺未遂	はい	31	32.0
	いいえ	64	66.0
	未記入	2	2.0
自殺未遂時の飲酒	はい	24	77.4
	いいえ	6	19.4
	未記入	1	3.2
救急搬送	はい	14	45.2
	いいえ	17	54.8
救急搬送時の飲酒	はい	13	92.9
	いいえ	1	7.1
このまま死ねたらいいのに	はい	55	56.7
	いいえ	41	42.3
	未記入	1	1.0
飲み続けていれば自殺していた	はい	54	55.7
	いいえ	36	37.1
	未記入	7	7.2
今も死にたい	はい	6	6.2
	いいえ	89	91.8
	未記入	2	2.0

加している者は86名 (88.7%)、参加が不規則な者は11名 (11.3%) であった。

2. 自殺に対する意識および態度 (表2)

「これまでに真剣に死にたいと考えたことがある (自殺念慮)」者は58名 (59.8%)、その時に飲酒していた者は、45名 (77.6%) であった。「真剣に死にたいと考えて何か行動を起こしたことがある (自殺未遂)」者は31名 (32.0%)、その時に飲酒していた者は24名 (77.4%) であった。「自殺未遂で病院に搬送されたことがある」者は14名 (45.2%)、その時に飲酒していた者は13名 (92.9%) であった。「これまでに、このまま酒を飲んで死ねたらいいのにと考えたことがあった」者は55名 (56.7%) であった。「もし自分が酒を飲み続けていれば、自殺していた可能性がある」者は54名 (55.7%)、「今現在も死にたいと考えている」者は6名 (6.2%) であった。

3. 男性の自殺未遂経験有無別特徴 (表3)

今回は女性が12名と少数のため、統計的な分析対象から除外した。男性で自殺未遂経験のある者は24名 (28.9%) (以下:「未遂経験あり群」)、自殺未遂経験のない者は59名 (71.1%) (以下:「未遂経験なし群」) であった。

自殺未遂経験と「婚姻状況」「同居者の有無」「断酒期間」「再飲酒の有無」では統計学的に有意差はみられなかった。

「未遂経験あり群」の平均年齢は46.2 ± 9.1歳で、「未遂経験なし群」は55.4 ± 10.3歳で、「未遂経験あり群」が統計上有意に若かった。

「未遂経験あり群」は95.8%が10代からの飲酒があり、「未遂経験なし群」の67.8%と比較して有意に多かった。

アルコール依存症と診断された平均年齢は、「未遂経験あり群」で38.7 ± 7.4歳、「未遂経験なし群」で45.2 ± 11.8歳と「未遂経験あり群」がアルコール依存症と診断された平均年齢が若かった。

断酒会への出席状況を見ると、「未遂経験あり群」は週1回以上が79.2%、不規則が20.8%、「未遂経験なし群」は週1回以上が72.9%、不規則が6.8%と「未遂経験あり群」の不規則な参加が多かった。

．考 察

1) 自殺念慮および自殺未遂の経験率

本調査では、過去に自殺念慮があった者が約6割おり、全国調査¹²⁾の約4割と比較すると高い割合である。また、自殺未遂は約3割で、全国のそれは2割とこちらも高い割合である。全国調査での対象者の平均年齢は60歳であり、今回の沖縄県での調査では平均年齢が52歳と若い会員が多い。自殺念慮や自殺未遂の経験のある群は、ない群に比べて平均年齢は低い傾向があり、それが今回の

調査と全国調査との差に繋がった可能性がある。WHOのJose M Bertolote氏が、「自殺予防はある地域に該当することが、かならずしも、そのまま他の地域にも当てはまるとは限らない」と述べており¹³⁾、沖縄県の断酒会に参加しているアルコール依存症者は全国のそれと比較すると若い傾向があり、沖縄県の特徴を踏まえた対策が必要となると考えられる。

2) 自殺念慮や自殺未遂時の飲酒

斉藤の調査によると、自殺念慮や自殺企図は、連続飲酒で身体が酒を受け付けなくなっている時が最も多いと報告している¹⁴⁾。また、自殺企図者の30~70%、自殺既遂者の18~66%において企図時に酩酊していたことも報告されている¹⁵⁾。本調査でも自殺念慮や自殺未遂は約8割が飲酒時に起

表3 男性の自殺未遂の有無別背景および自殺に関する意識・態度 ()内は%

		未遂経験あり n = 24	未遂経験なし n = 59	有意確率
平均年齢		46.2 ± 9.1	55.4 ± 10.3	P < 0.001
婚姻	既婚	6 (25.0)	31 (52.5)	0.055
	未婚	9 (37.5)	11 (18.7)	
	離婚または死別	7 (29.2)	13 (22.0)	
	未記入	2 (8.3)	4 (6.8)	
10代でアルコールを飲んだ	はい	23 (95.8)	40 (67.8)	0.009
	いいえ	1 (4.2)	18 (30.5)	
	未記入	0 (0.0)	1 (1.7)	
アルコール依存症と診断された平均年齢		38.7 ± 7.4	45.2 ± 11.8	0.019
断酒できているのは、断酒会に参加しているから	はい	19 (79.2)	46 (78.0)	1.000
	いいえ	5 (20.8)	12 (20.3)	
	未記入	0 (0.0)	1 (1.7)	
過去に「このまま酒を飲んで死ねたらいいのに」と考えた	はい	21 (87.5)	22 (37.3)	P < 0.001
	いいえ	3 (12.5)	37 (62.7)	
	未記入	0 (0.0)	0 (0.0)	
今現在も死にたい	はい	3 (12.5)	1 (1.7)	0.065
	いいえ	20 (83.3)	58 (98.3)	
	未記入	1 (4.2)	0 (0.0)	
もし酒を飲み続けていれば自殺していた	はい	20 (83.3)	23 (39.0)	P < 0.001
	いいえ	3 (12.5)	32 (54.2)	
	未記入	1 (4.2)	4 (6.8)	
断酒会への出席状況	週1回以上	19 (79.2)	43 (72.9)	0.018
	月1回以上	0 (0.0)	12 (20.3)	
	不規則	5 (20.8)	4 (6.8)	

っており、しかも「もし飲み続けていれば自殺していた可能性」も6割が認めており、自殺を予防するためには断酒が望ましいと考えられる。約8割が「現在断酒できているのは断酒会に参加しているから」と答えており、断酒会への参加で断酒を行い、断酒が継続することによって、自殺は予防できるのではないかと考えられる。これはMurphyら¹⁶⁾の自殺既遂者の調査でも、過去にアルコール依存症の診断を受けた者で、現在は診断基準を満たさない状態、つまり断酒が継続できている者は、自殺既遂者の中にいなかったとの報告からも示唆される。

3) 自殺未遂経験者の特徴 (男性)

男性の自殺未遂経験有無別の特徴では、「未遂経験あり群」が「未遂経験なし群」に比較して有意に年齢が若いという結果であった。松本らの研究¹⁷⁾でも年齢の若い群が、年齢の高い群に比較して自殺念慮や自殺未遂が多いと報告している。これは年齢が高い群のアルコール依存症者は、これまでに自殺念慮や未遂の経験がない者が生き残った結果であり、自殺念慮や未遂のあった者は既に死亡しており、若い群はまだ死亡していないという事も考えられると述べている。しかし、今回の調査では自殺の「未遂経験なし群」は、アルコール依存症の診断年齢も高い為、単に生き残った者の意見だけとは考えにくい。「未遂経験なし群」は「未遂経験あり群」と比較して10代からの飲酒率は低い為、飲酒の開始が遅かったか、あるいは飲酒量の増加が遅かった可能性も考えられる。その結果、高い年齢でアルコール依存症の診断を受け、断酒するために断酒会に繋がったことから、自殺を考えずに現在も生存していると考えられる。したがって本研究および先行文献より、若い年齢ほど、またアルコール依存症の診断が若いほど、自殺未遂の危険性があることが示唆される。しかも、一般人口でも15歳から39歳までの死亡原因の1位が「自殺」であることから¹⁾、若

い年齢ほど自殺予防が重要となると考えられる。

男性の自殺「未遂経験あり群」は20%が断酒会へ不規則な参加をしていた。鈴木¹⁰⁾の調査では、アルコール依存症の予後が良好な群ほど断酒会へ入会しており、断酒会への入会がアルコール依存症の予後に影響を与えていると述べている¹⁰⁾。今回の調査では、断酒会に参加している者を対象としており、結果から考えると入会だけではなく、規則的な参加が自殺予防に繋がる可能性も考えられる。

本研究の課題としては、断酒会へ参加しているアルコール依存症者を対象としているため、断酒会に参加していないアルコール依存症者の意見を反映していないこと、また女性の対象者が少なかった為に、女性の特徴を明らかにすることができなかった点である。同じようなアルコール依存症者の自助グループであるAA (Alcoholics Anonymous) における調査では自殺念慮、自殺企図ともに断酒会参加者より高かったという報告もあり¹⁸⁾、また女性のアルコール依存症者で自殺念慮や自殺未遂の多いことが知られており^{12,19)}、今後は調査対象の自助グループを追加、あるいは自助グループに参加していない者、また女性対象者の把握などを検討する必要がある。

結 論

調査結果より、アルコール依存症者の自殺念慮や自殺未遂の経験率の高いことが分かった。自殺予防はうつ病対策だけではなく、今後はアルコール問題も重要な対策として位置づけ、調査および研究が望まれる。

男性のアルコール依存症者で自殺未遂の経験のある者の特徴より、飲酒は20歳を超えてから行い、依存症とならないような適正飲酒を心掛け、依存症と診断された場合は、断酒会への規則的な参加と断酒を継続することで、自殺行動を予防できる可能性が示唆される。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただいた沖縄県断酒連合会の皆様に厚く御礼申し上げます。なお本研究は科研費（21792334）の助成を受けたものである。また本研究の一部は、第32回日本アルコール関連問題学会（神戸）および第34回日本自殺予防学会（東京）において報告した。

引用文献

- 1) 厚生統計協会 (2010) : 国民衛生の動向, 57(9)
- 2) Lonnqvist J K, Henriksson M M, Isometsae E T, Marttunen M J, Heikkinen M E, Aro H M, Kuoppasalmi K I (1995): Mental disorders and suicide prevention. *Psychiatry Clin Neurosci*, 49, Suppl1, 111-116
- 3) 高橋祥友 (2007) : 自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究 心理学的剖検のパイロットスタディに関する研究 パイロットスタディにおける自殺と精神障害の関係についての検討, 自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究 平成18年度 総括・分担研究報告書, 27-40
- 4) 高橋邦明, 内藤明彦, 森田昌宏, 須賀良一, 小熊隆夫, 小泉毅 (1998) : 新潟県東頸城郡松之山町における老人自殺予防活動 : 老年期うつ病を中心に, *精神神経学雑誌*, 100(7), 469-485
- 5) Henriksson, M M; Aro, H M; Marttunen, M J; Heikkinen, M E; Isometsae, E T; Kuoppasalmi, K I; Lonnqvist, J K (1993): Mental disorders and comorbidity in suicide. *Am J Psychiatry*, 150(6), 935-940
- 6) Maria A. Oquendo, MD, Diaane Currier, PhD, Shang-Min Liu, MS, Deborah S. Hasin, PhD, Bridget F. Grant, PhD, PhD, Carlos Blanco, MD, PhD (2010): Increased risk for suicidal behavior in comorbid bipolar disorder and alcohol use disorders: results from the National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions (NESARC). *Journal of Clinical Psychiatry*, 71(7), 153-159
- 7) 松本俊彦, 小林桜児 (2008) : 「心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究」アルコール・薬物使用障害患者における自殺念慮と自殺企図の経験率に関する研究, 心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究 平成19年度 総括・分担研究報告書, 89-93
- 8) 松本桂樹, 世良守行, 米沢宏, 藤原誠二, 重黒木一, 新貝憲利 (2000) : アルコール依存症者の自殺念慮と企図, *アディクションと家族*, 17(2), 218-223
- 9) 謝達文, 大原浩一, 牛見豊, 大原健士郎, 鈴木康夫, 横山敏登 (1991) : 特集 アルコール関連障害と社会精神医学, *社会精神医学*, 14(1), 32-37
- 10) 鈴木康夫 (1982) : アルコール症者の予後に関する多面的研究, *精神神経学雑誌*, 84(4), 243-261
- 11) 野田哲朗, 川田晃久, 安東龍雄, 平野建二, 大石和弘, 今道裕之, 倉内道治, 岩田泰男, 日山興彦 (1988) : 一衛星都市 (大阪府高槻市) におけるアルコール症者の実態と長期予後 地域酒害対策との関連において, *アルコール研究と薬物依存*, 23(1), 26-52
- 12) 赤澤正人, 松本俊彦, 立森久照, 竹島正 (2010) : アルコール関連問題を抱えた人の自殺関連事象の実態と精神的健康への関連要因, *精神神経学雑誌*, 112(8), 720-733
- 13) Jose M. Bertolote (2007), 高橋祥友訳 (2007) : 自殺予防総合対策センターブックレットNo.1, 国立精神・神経センター精神保健研究所 自殺予防総合対策センター, 東京
- 14) 斉藤学 (1980) : アルコール依存症者の自殺企図について, *精神神経学雑誌*, 82(12), 786-792

- 15) Sher, L (2006): Alcoholism and suicidal behavior: a clinical overview. Acta Psychiatrica Scand, 113(1), 13-22
- 16) Murphy, G E; Robins, E (1967): Social factors in suicide. JAMA, 199(5), 303-308
- 17) 松本桂樹, 世良守行, 米沢宏, 藤原誠二, 重黒木一, 新貝憲利 (2000) : アルコール依存症者の自殺念慮と企図, アディクションと家族, 17(2), 218-223
- 18) 芦沢健 (2010) : AA 有志を対象とする自殺の調査, 精神神経学雑誌, 112(10), 1058
- 19) 松本俊彦, 小林桜児, 上條敦史, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 竹島正 (2009) : 物質使用障害患者における自殺念慮と自殺企図の経験, 精神医学, 51(2), 109-117

Study on Suicide and Alcohol-Dependent Patients Who Attend Alcoholic Self-Help Groups in Okinawa

Shunji Ura RN,PHN,MHSc Fujiko Touyama RN,PHN,DHSc
Mayumi Taba RN,PHN,MNSc Misuzu Takahara RN,PHN Yoshide Kinjo DHSc

Abstract

【Objective】 The purpose of this study is to reveal certain characteristics of alcohol-dependent patients who attend alcoholic self-help groups in Okinawa in relation to their suicidal tendency.

【Subjects & Method】 In August and September 2009, anonymous questionnaires were given to 128 alcohol-dependent patients who were attending alcoholic self-help groups in Okinawa. The questionnaires inquired as to their thoughts and attitudes towards suicide.

【Results】 In the course of the study, 101 questionnaires were collected (78.9% of collection rate). After invalid responses were removed, 97 valid responses were used for this analysis (response rate of 75.8%). Of the subjects, 85 (87.6%) were male, and 12 (12.4%) were female. The average age of each subject was 52 (standard deviation of 11.2 years). In this study, 58 subjects (59.8%) had suicidal thoughts, and 31 subjects (32.0%) had actually attempted suicide. There was a correlation between male subjects' experiences in suicide attempts and their responses to the following matters: their age, whether or not they started to drink in their teen years, their age when they were initially diagnosed as alcoholics, and their attendance record at self-help groups. No statistical significance was observed in male subject's responses to the following matters: their marital status, whether or not they are living with anyone, how long they are abstaining from alcohol, and whether or not they started to consume alcohol again.

【Conclusion】 The male subjects who had attempted suicide were; young, started to drink in their teens, diagnosed as alcoholics at a young age, and only sporadically attended self-help group sessions. Comparing our survey results to the nation-wide survey results, alcohol-dependent patients who attend alcoholic self-help groups in Okinawa had higher rates of experiencing suicidal thoughts and attempts.

Key word: suicide, alcoholic, self-help group, okinawa